

## 澤田英史さんを想う

松崎正治（同志社女子大学）

私が、澤田英史さんと知り合ったのは、氏が一九八八年に神戸大学大学院に入学され、両輪の会で実践報告を始めた頃だった。澤田さんはその時、三八歳。両輪の会でお聞きした、「枠組み作文」や「読むか通信」のアイデアの素晴らしさと実践的な有効性の大きさは、自分が使ってみて実感した。澤田さんは、次々と素晴らしい作品を生み出す緻密な芸術家だった。そんな革新的な実践のアイデアを穏やかに話され、いつもにこにこして他の人の報告を聞いておられたのだった。

毎年春夏に、両輪の会の合宿で共に学び合ってきたのが、澤田さんは一九九八年の夏に入院され、翌年から腎臓の人工透析を始めたのだった。両輪の会で、澤田さんのお姿を拝見する事がなくなっていった。それと交錯するように、澤田さんは短歌を深めていかれた。一九九九年に、澤田さんは第一歌集『異客』（終書房）を出版された。

その歌集を読んだとき、それまでの私の澤田像が変わっていった。

・誰もぬねところへ不意に降りてきて人間みたいな顔をしてゐた

・今おれは何をしてゐるヒトといふこんな重たいからだをまとひ  
・うかうかと自分を差し出してしまひさうなポストの口がゆふぐ  
れに開く

澤田さんは、歌集タイトル通り「異客」だったのだ！とその時思った。この地球に「異客」として降り立った。そんな感覚で生きておられたのか。しかし、自分にもこの「異客」感覚はあるなあと、ふと思った。共感する自分がいる。

二〇〇七年に出された第三歌集『さんしおん』（角川書店）にも同様に惹かれる歌がある。

・それぞれに生きるかたちを描きつつ人は生きゆくそぐはぬまま  
に

この歌は、誰もが多少は持っている、人生の挫折とその後の歩みを思い出させてくれる。そして何かが自分を支えていく。

「短歌が好きだ。大げさでなく、いま短歌によって生かされている」（沢田英史（二〇〇四）あとがき・『沢田英史集』邑書林 一四一頁）

人は出会うべくして、何かに出会う。私には、短歌に出会った沢田さんが幸せだったように思える。